



「あのう、すみません。この辺に首落ちていなかったでしょうか？」

声をかけてきたその男には“首”が付いていなかった。ややくたびれたグレーのスーツで、猫背ぎみに歩く男は、今ない顔の前に手でひさしを作りきよろきよろと周りを見渡していた。

「この辺で失くされたんですか？」

心配そうに尋ねる私に男は答えた。

「ええ、昨夜ここを通った時までは確かにここに乘っかっていたんですがね、家に帰りついて、うがいをしようと思ったら、首から上がらないことに気がついたんですよ」

男は財布を落とした時のように困った顔をした。いや、首から上はないのだから正確にはわからないが恐らくそんな顔をしているのだろうと思った。

「……とにかく困っているんですよ。昨夜もあわてて探しに戻ったんですけどね、もう暗くて見つけることができなかつたんですよ」

「警察には行ってみたんですか？ 親切な人に拾われていればきっと交番に届けられてますよ」

確か近くにの駅前に駐在所があったはずだ。生首コレクターでもない限り誰かに拾われていれば警察に届けられているだろう。

「ええ、最近は“首”の落とし物も多くなって聞いていたんで、私もすぐに交番に駆け込みましたよ。でも、“落とし首”の中に私のはなかつたんです。念のため落とし首届は出してきましたけど、一夜明けた今日になっても連絡がないんでもう一度さがしに来たんですよ。悪用でもされたらと思うと心配で……」

そう言うと男はぐったりとうなだれた。

自分の首がないのだ。不安で仕方がないことだろう。

「でも、なんで首を落としたりしたんですか？ 普通首はつながっているものでしょう？」

その言葉に男は怒りに顔をほてらせた、ような気がした。

「それはこの不況が悪いんですよ！ まじめに働いている私たちまでが経費節減のためっていう理由で“首”を切られてしまったんですから。昨夜もハローワークの帰りだったんですよ。首を切

られているのをすっかり忘れていて、職が見つからなくて首をうなだれて帰っていたものだから
転げ落ちてしまったみたいなんですよ。それに気がつかなかっただけ、このざまです」

男は首のない頭を指差して言った。「結構最近、私みたいな人多いみたいですよ、仕事さえ決まれば首もつながるっていうのに……」

そう言い残し、男は首の搜索に戻った。

確かに、この道がハローワークへとつながる通りのためか、周りを見渡すと切られた首を落とさないように手で押さえて歩く人の姿が多く目についた。首に乗せるのをあきらめ小脇に抱えるつわものもいる。

しかし、このご時世、仕事を見つけるのも一苦勞だ。この男も首がないままでは面接すらままならないだろう。顔の見えない男を雇うほど日本の企業も心が広くはない。

しかし、この男とここで会ったのも何かの縁かもしれない。私は歩道わきの生け込みを探す男に声をかけた。

「仕事に就ければあなたの“首”もつながりますよね、実は私は小さな工場を経営しているんです。ここで会ったのも何かの縁、そんなに給料は高くありませんが良かったらうちで働いてみませんか？」

その申し出に男は大喜びで駆け寄ってきた。

「えっ！いいんですかっ！もちろんです力いっぱい働かせていただきますよ」

そう言って男は私の手を握って握手を交わした。

「いえいえ、こちらこそよろしくおねがいします」

私がそう言い終わると、ガサガサと歩道わきの茂みが揺れ、ボールのように飛び出した“首”が男のあるべき位置におさまった。

「やった。“首”がつながりましたよ。社長ありがとうございます。力いっぱい遮二無二働きます。私こう見えてまじめなんですよ。前の仕事も無遅刻で、まじめが服を着てる、なんて言われてましてね……」

くっついた男の首はいかにも軽そうな容姿をしていた。次から次に齒の浮くような調子のいいことをまくしたてる。顔が見えないことで男の性格を読み切れなかったせいもあるが、これはちょっと早まったかもしれない。

「ちょっと、君。適当なことを言っているようだが、私の工場は正確な仕上げで信頼されているんだ、仕事の手を抜くようなことは絶対にしないでくれよ」

私の言葉にやっと戻った頭に手を当て、軽薄な笑いを浮かべる。

「もちろんですよ社長っ。力いっぱい働きますよお」

ははは、と笑う男の口の中には舌べろが二枚、ひらひらと揺れていた。これは典型的な二枚舌だ。

「ちょっと君、嘘をつくのはやめなさい。私は真面目に話しているんだぞ」

へらへら笑い続ける男の腕をつかむ、するとスッポリと男の手が抜けた。

「あ、あれ？おかしいな」

男は焦りを浮かべた表情で、抜けた手を見つめ首をかしげた。

「いや、ホントに手抜きなんてしませんから」口の中では二枚の下が踊る。

「貴様、やっぱり手を抜く気だな。そんな人間を雇うことはできない。やっぱり貴様は首だ！」

「そんなあ」

男の首は再び宙を舞った。

終り